

これから若者になるひとりひとりに
「つながり」と「経験」を。

認定NPO法人 D×P

[活動報告書]

2015

D×P ANNUAL REPORT 2015



D×Pと、ひとりひとりの高校生をご支援くださっている皆様へ
感謝を込めて。

「今週は授業がたくさん入ってて…！」

2015年の秋。

インターン生が笑いながらも少し疲れたように、そう話していました。

それもそのはずです。2015年度は、D×Pのプログラム「クレッシェンド」の授業数は13校178回。

2014年度は8校111回だったので、大きく伸びた年でした。

先生からの授業依頼が増え、創業期に比べるとはるかにD×Pをご信頼いただけるようになりました。

さらに新しい取り組みである生活保護家庭の中高生向けプログラムも、

参加した子どもが高校進学するなどの成果も出せるようになりました。

一方で、学校の先生からのご依頼数に対して、プログラムを届けるための人手・資金不足に悩みました。

一部のコンポーザーの皆さんやスタッフに負担をかけてしまった1年でもありました。

また、授業後のプログラム「アフタークレッシェンド」に本腰を入れられないという課題もありました。

組織としては、2015年9月に共同創業者の朴が退職することとなりました。

それが大きな契機となり、「組織として強くなろう」という意志が団体内で生まれたと感じています。

認定NPO法人格を取得し、経験豊かな新しいスタッフも入職、ビジョンと事業計画の見直し、

理事会の再設計…。事務所内も見違えるほど様変わりしました。

これから、2018年度には関西の各地域で高校生が集える居場所を作り、

様々な機関と連携しながら困難を抱える高校生たちを孤立させない仕組みをつくります。

そして、関西以外での活動拠点も増やしていきます。

2015年度はその基盤ができた年度だったと思います。

NPOとして着実に成果を出し、「ひとりひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会」

を皆様と一緒に作っていききたいと思います。

いつもあたたかく見守ってくださってありがとうございます。

ぜひこの活動報告書で、D×Pのありのままの姿をご覧ください。

2016.7

理事長 今井 紀明



ひとりひとりの若者が 自分の未来に希望を持てる社会

その若者がどんな境遇にあったとしても、

自分の未来に希望を持てるような社会の構造をつくる。

これが、D×Pのビジョンです。

“自分の未来に希望を持てる”とは、

「自ら這い上がって立ち直れる」という意味ではなく、

「たくさんの人の手を借りながら、自分なりの一步を踏み出せる」

ことを意味しています。

子どもも大人も、豊かな人とのつながりを持っていて、

生きていくなかで嬉しいことも辛いこともありながらも

「まあ、これからも大丈夫かもな。」と思えるような。

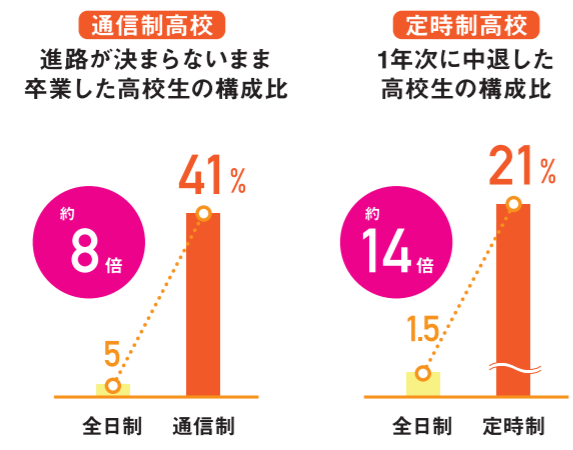
それが、“自分の未来に希望を持てる”ことだと思っています。

これから若者になるひとりひとりに、「つながり」と「経験」を。

D×Pは、しんどさを抱えた高校生に「社会関係資本の構築」と「成功体験の醸成」の2つの機会を届けるNPOです。

D×Pが
取り組む
課題

自分の未来に可能性を見いだせないまま
社会に放り出される高校生



「しんどさ」を抱えている
高校生が多いから



- 例えば…
- 定時制高校の生徒の1/3がひとり親家庭
 - 通信制高校の生徒の60%が不登校経験
 - 働きながら学ぶ勤労学生は減少中

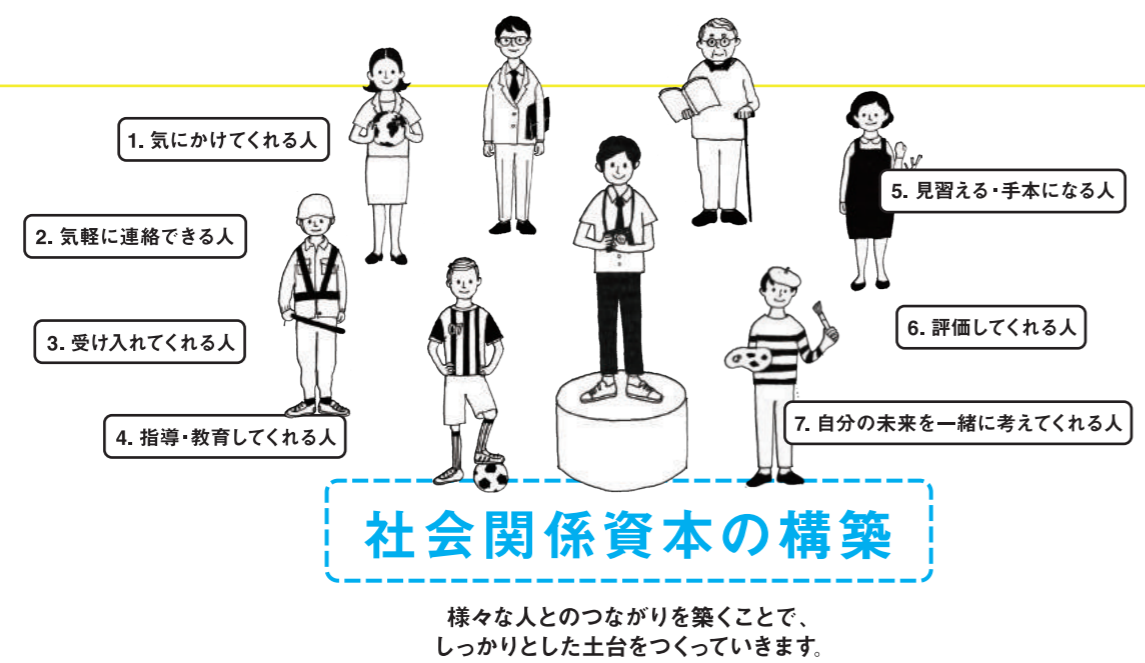
つながり
が乏しいから

自分のこれからを前向きに考えられないのは、相談できる人や、受け入れてくれる人、手本になるような人などが周囲に少ないからだD×Pは考えます。

「できた!」という経験
に乏しいから

自己肯定感が低く、自信を持って歩き出せないのは、自分なりに「できた!」と思えるような経験が少ないからだD×Pは考えます。

D×Pの
活動



1 クレッシュェンド

通信・定時制高校での授業

社会人・大学生ボランティアとの対話を軸にしたプログラムで、安心して話せるオトナと出会います。

詳しくは P.06 へ

授業での出会いをきっかけに「この人とまた話したいな」と思えるようになる

2 アフタークレッシュェンド

授業後もつながる

同窓会、写真部、アート部、フットサルなどの様々な企画を通じて、高校生の「社会関係資本」を構築します。

詳しくは P.08 へ

人とのつながりができると、「何かやってみたい」と思えるようになる

3 チャレンジプログラム

さらなる挑戦

宿泊型インターンや、スタディーツアーの参加、アート展・写真展の開催、イベント運営など、その高校生の挑戦する場を提供するプログラムです。

詳しくは P.09 へ

Highlights of 2015

2015年度・D×Pの取り組み

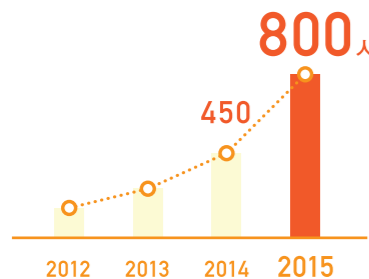
「混乱」のなか、着実に道筋が見えた1年。

2015年度は、学校の先生からの授業の依頼が飛躍的に伸び、多くの高校生にプログラムを届けることができました。一方で、人材不足に悩み、一部のスタッフやコンポーザーに負担をかけた1年でもありました。しかし、そのおかげで高校生一人ひとりのニーズを知ることができ、今後の展望(P.16)もより鮮明になってきました。

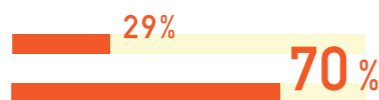
1 クレッシュェンドに参加する 高校生の数が飛躍的に増えた

プログラム参加生徒数が 過去最高の800人に!

2015年度はクレッシュェンドを含めたプログラムの参加生徒数が過去最高の800人に。しかし、運営するスタッフ数は2014年度とほぼ変わらず。夜間定時制高校のプログラムに参加できるコンポーザーの数も少なかったことから、スタッフやコンポーザーの負荷の高い1年になりました。



通信制高校でのクレッシュェンドの様子



高校生の「やりたい」気持ちや 自己肯定感が向上

高校生に対して行ったプログラム前後のアンケートでは、「高校卒業後にやりたいことがある」という項目に対し、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した生徒は、プログラム前29.4%→プログラム後は70.1%に向上しました。また、「自分にはよいところがあると思う」と回答した生徒は、25%→50%にまで向上しました。



大阪の定時制高校の 約3分の1に導入!

2014年度は8校で授業を行いました。今年度は13校。大阪の定時制高校でD×Pのプログラムを導入している学校は7校で、全体の約3分の1となりました! 1年生で行ったクレッシュェンドでの1年生の変化の様子を目の当たりにして「2年生でもやりたい」と言ってくれる先生もおり、学校全体でD×Pのプログラムを導入いただく学校も増えました。

2

アフタークレッシュェンドの着手

「社会関係資本」をつくるため、2015年度は少しずつ授業「後」の体制づくり(アフタークレッシュェンド)に取り組みました。通信制高校での授業のあとは「同窓会」を7回実施。また定時制高校では、学祭にスタッフが一般参加したり、学校の体育館でスポーツ大会をしたりと、授業で出会ったオトナたちにまた出会う機会をつくりました。しかし、授業数の急増と人員不足により、授業運営に手一杯となってしまい、アフタークレッシュェンド参加生徒数は30人、企画回数は17回にとどまりました。

「社会関係資本7項目」を仮置き

800名もの生徒に出会いながら、「一般的には、親・友人・先生・地域の人々が周囲にいるが、様々な事情によりそういったつながりが欠如している生徒ほど、希望が持てていない」ということを実感しました。そのうえで、「D×Pの言う「社会関係資本」とは具体的にどのようなものか?」を生徒の声を元にスタッフ内で議論し、その結果以下の「社会関係資本7項目」が洗い出されました。

(2016年度は、①外部研究者と連携してこの項目とエビデンスをつきあわせ、②これら項目をD×Pの仮説として、「アフタークレッシュェンド」の仕組みを創ります。)

社会関係資本7項目

1. 気にかけてくれる人
2. 気軽に連絡できる人
3. 受け入れてくれる人
4. 指導・教育してくれる人
5. 見習える・手本になる人
6. 評価してくれる人
7. 自分の未来と一緒に考えてくれる人



アフタークレッシュェンド「写真部」の様子

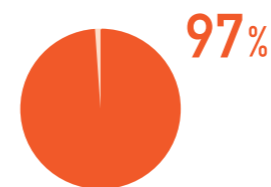
クレッシュェンドの
限界値が明確になったことで、
アフタークレッシュェンドの
役割が見えてきた

3

経済的な困難を抱えた中高生など、
新しい層にもアプローチ
することができた

大学・専門学校1年生向けプログラム

不本意入学の学生が入学生のうち大半を占めるという大学も多くあります。D×Pは、全3校の大学および専門学校で、1年生もしくは入学前の学生に対し、「クレッシュェンド」をアレンジしたプログラムを実施。参加学生の97%が「これから学校生活を頑張ろうと思えた」と回答し、入学前のモチベーション向上と中退予防につなげることができました。



IBW美容専門学校での様子



泉大津市生活保護家庭向けプログラムの様子

生活保護家庭向け プログラム参加者が進学へ

泉大津市と提携し、生活保護家庭で暮らす中高生向けのプログラムを2014年度から継続実施しています。生活保護家庭の子ども向けの学習支援の場は各自治体にあります。そこでD×Pは「やってみたい」という気持ちを持ちこせるような場「いごちかふえ」を実施。中卒で所属先がない状態だった生徒と、中学時代に不登校だった生徒の2人が2016年3月に高校進学を決めました。またD×P写真部に参加するようになった生徒もおり、少しずつ活動の成果が出始めています。

4

認定NPO法人格を取得

2015年6月8日付で、D×Pは大阪市の認定を受け「認定NPO法人」になりました! 認定NPO法人とは、所轄庁から「活動内容が一定の基準を満たして適正であり、高い公益性をもっている」と認められ、税制上の優遇措置を受けているNPO法人です。ご支援いただいている皆様のおかげです。有難うございます!

D×Pは新体制へ

2015年9月に創業者の朴が理事および共同代表を退職しました。その後、D×P創業期から現場運営と財務を担っていたファイナンスアナリストの塩田が副理事に就任。D×Pは新しいスタッフ3名が入職しました。また、2015年8月~12月には、「NPOマネジメントスクール」に参加し、ビジョンや成果目標の見直しを行いました。

これまでの実績に ご評価をいただきました

- 第5回地域再生大賞 優秀賞受賞
- 第6回コモンズ投信株式会社 SEEDSCap (社会起業家応援プログラム) 選定
- CB-CSOアワード2015 優秀賞受賞

詳しくは P.13へ



D×Pスタッフの集合写真

組織基盤が強化され、
外部評価もいただけた



クレッシェンド

過去を受け入れ、未来を描く

「クレッシェンド」は、通信・定時制高校で行っているD×Pの独自プログラム。多様なオトナとの関わりを通じて高校生が過去を受け入れ、未来を描くことを目的とした授業です。プログラムの最後には、高校生が「このオトナになら自分のことを話してもいいか」と思えるようなオトナと高校生の関係づくりを目指しています。

プログラムの特徴

1. オトナと高校生の「関わり」を軸にした授業

クレッシェンドは、D×Pの社会人・大学生ボランティア「コンポーザー」(=オトナ)と高校生との関わりと対話を軸にした授業です。高校生は様々なオトナの過去と現在の姿を知りながら、自分の過去と未来を考えていきます。

2. 「否定しない」姿勢

D×Pの基本3姿勢「否定しない」「様々なバックグラウンドから学ぶ」「年上・年下から学ぶ」を大切にしながら高校生と関わります。特に「否定しない」については、高校生にも、この授業の中では否定しない姿勢で同級生とも関わるよう伝えています。

3. 少人数&連続して同じメンバーと関わる

数ヶ月間、全4回以上にわたる授業では、同じ高校生に対して同じオトナたちが関わります。また、原則オトナと高校生の比率はおよそ1対3の少人数制。回数を重ねるごとに、少しずつ関係性を築いていくことができます。

4. 単位認定された授業

通信・定時制高校の「総合的な学習の時間」や「産業社会と人間」などの授業の枠組みのなかでクレッシェンドを行います。単位認定された授業のため、ある程度参加の強制力があり、しんどさを抱えた高校生にリーチしやすくなっています。

5. 授業後も繋がり続ける仕組み

D×Pでは、クレッシェンドのあとも学校外で高校生とつながり続けられる「アフタークレッシェンド」というプログラムや、高校生の「なにかやってみよう」という気持ちに応える「チャレンジプログラム」があります。

プログラムの内容例

全4回の授業の場合、例えばこんなプログラムを行います。

①



失敗なんてあたりまえ!

コンポーザーの過去の辛かった経験・しんどかった経験談を聞きます。いじめられた経験、親からの暴力、仕事での挫折経験...様々なオトナの過去を知ります。

②



みんなの生活みてみよう!

コンポーザーの現在の生き方や仕事・大学生活、今の生き方に至った経緯を聞きながら、自分の「これから」をちょっとだけ考えてみます。

③



みんなでユメプレ!

ユメプレは「ユメプレスト」の略。D×Pでは大きな目標からちょっとやってみようという気持ちも含めて「ユメ」であると定義しています。自分の「ユメ」をクレオンで描き、自分の言葉で表現します。

④



知らなかったジブンを知らう!

これまで授業に関わった同級生やコンポーザーに抱いた印象をメッセージカードに書いて、伝え合います。受け取ったカードを読んで、気がついていなかった「自分」の姿を知ることができます。

コンポーザーとは?



コンポーザーとは、D×Pの授業に携わる社会人・大学生ボランティアのこと。高校生が「過去を受け入れ、未来を描く」ことができるように、一人の人間として高校生と関わるオトナたちのことです。

1. 高校生の話にじっくり耳を傾ける



コンポーザーは、一方的に教える立場にあるのではありません。高校生の話に耳を傾けて、高校生ひとりひとりの考えを受け入れる存在です。

2. 過去の経験 / 現在の生活に至った経緯を伝える



自分の過去の辛かった経験談や、現在の仕事・生活に至った経緯を高校生に話します。自分の考えを押し付けるのではなく、「私はこうだったよ」と自分を主語にして伝えます。

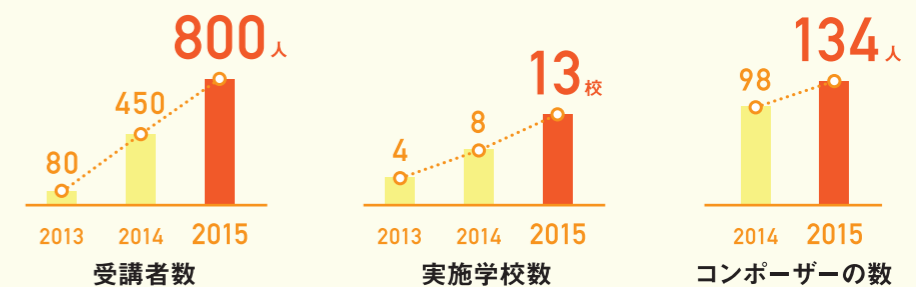
3. 高校生と共に学ぶ



高校生と向き合うことで、コンポーザーもまた「過去を受け入れ、未来(いま)を考える」機会となることを目指します。

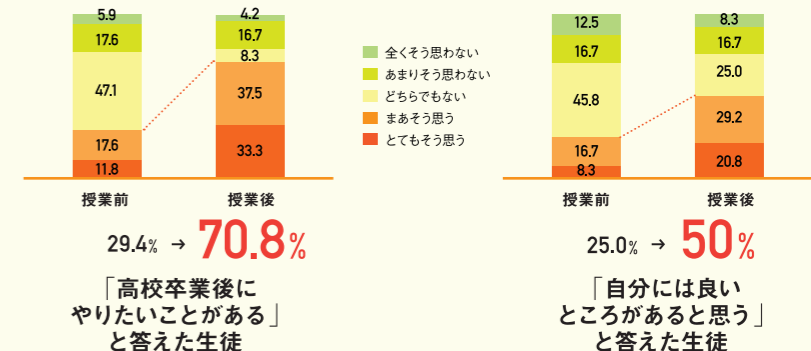
プログラムの実績

2015年度は、学校の先生方からのご依頼も増え、クレッシェンドを受けた高校生の数が大きく増えた年でした。一方、コンポーザーの数は36人増加にとどまり、担い手不足に悩む一年でした。



プログラムの成果

ある学校で行ったクレッシェンドで、プログラムを受講する前と後でアンケートを取った時の結果です。「高校卒業後にやりたいことがある」の項目に対し「とても思う」「まあそう思う」と回答した生徒は、プログラム前が29.4%だったのに対し、プログラム実施後は70.8%に上昇しました。また先生からは「クラスの雰囲気がとてもよくなった。中退予防につながったのでは」「進路指導室に来るようになった生徒がいた」という声もいただきました。





アフタークレッシェンド



チャレンジプログラム

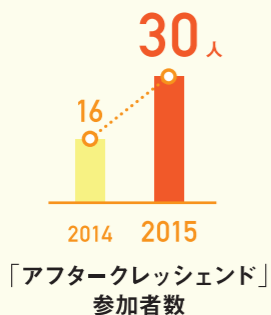
授業の「出会い」を、継続的な「つながり」に

「アフタークレッシェンド」は、授業(クレッシェンド)を終えたあとも高校生と繋がり続け、
高校生の社会関係資本を構築するための仕組みです。
他校の高校生同士やオトナたちとの横のつながりを創っていくことができます。

- 1 同窓会企画**
 クレッシェンド後に、そのクラスの高校生とコンポーザーがまた学校外で集まっておしゃべりする機会「同窓会企画」を実施しています。
- 2 写真部**
 みんなで外を散策しながら写真を撮って、撮った写真を見せ合いながら感想を伝え合う活動をしています。本格的なカメラに触りたい人から、気軽にカメラで撮りたい人まで、写真好きな高校生・オトナたちが集まっています。
- 3 映画部**
 みんなで映画を1本鑑賞して、観終わったあとに映画の感想を共有しあう活動をしています。クレッシェンドと同じく「否定しない」というルールの下、感想を共有しあいます。映画が好きな高校生・オトナたちが参加しています。
- 4 アート企画**
 「皆で一冊の絵本をつくる」というテーマで、全員でページごとのイラストを描くという活動を行いました。絵やイラストを描くのが好きな高校生が参加しました。
- 5 D×P女子会**
 その名の通り、女子たちのための企画!ネイル、お菓子づくり、キャンドルづくりなどを通して、ゆる〜くかつノンストップで女子たちが語り合います。

実績

2015年度のアフタークレッシェンドの参加生徒数は30人、企画回数は17回にとどまりました。継続参加している高校生にとっては安心できる居場所になっていますが、参加生徒数が少ないこと、クレッシェンドからの誘導の仕組みがないことが課題です。



高校生の声

写真を口実に、外に出る機会が増えた

僕は、通っていた通信制高校でのクレッシェンドを受けた後、スタッフの方に誘われて写真部に参加するようになりました。もともとカメラは特に好きではなかったし、普段は基本的に家にいて、長い時は2週間ぐらい外にでないこともあったけど、今は写真を撮ることを口実に1人で外に出かけることが増えました。前は何か理由がないと絶対外に行きたくないって思っていたんですが、外に出るってハードルが少し下がったという感じなんです。これからは、特に鳥のように、その瞬間にしか撮れないような、動いて撮りにくい生き物を追いかけて撮ってみたいです。

大関 哲洋(おおせき てつひろ)さん

「できた!」と思える経験をつくる

「チャレンジプログラム」は、高校生の「なにかやってみよう!」という気持ちに応えて、
その生徒にとっての挑戦となる機会を届けています。本人が自分なりに「できた!」と思える経験を積むことは
自信やこれからのアクションにつながっていきます。

- 1 写真展・アート展の開催**
 大阪のアメリカ村にあるギャラリーで、高校生が写真展やアート展を開催できる機会をつくれます。自分だけで楽しんでた写真や作品が、人の目に触れ、評価される経験は高校生にとって大きなチャレンジになります。
- 2 宿泊型インターンシップへの参加**
 1週間程度、地方の旅館で泊まり込みで旅館運営や農作業を手伝うインターンシップです。自宅や日常生活を抜けて、まったく新しい世界に飛び込むことができます。
- 3 海外スタディツアーへの参加**
 ほぼ無料で参加できる海外のスタディツアープログラムを高校生に紹介しています。

島根県 海士(あま)町
「但馬屋」

島根県の自然豊かな島にあるあたたかい雰囲気の旅館「但馬屋」。ここでは、旅館運営を手伝ったり、農作業や稲作のお手伝いをします。田舎暮らしや農業に興味のある高校生に紹介しています。

大分県 湯布院町
「時のかけら」

のどかな湯布院町の奥にある外国人向けゲストハウス「時のかけら」は、殆どのスタッフが外国人で英語が共通言語。ペットメイクや掃除、動物たちの世話をします。英語に興味がある高校生に紹介しています。

ココファンドプロジェクト
「フィリピンスタディーツアー」

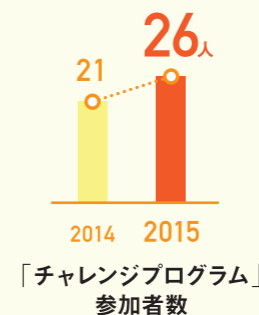
フィリピンで支援活動を続けるNPO法人アクセス主催のスタディーツアー。D×Pと株式会社ココフェルが企画するココファンドプロジェクトによって、高校生が無料で参加できる枠組みを作っています。

安田菜津紀さん企画
「カンボジアスタディーツアー」

フォトジャーナリストの安田菜津紀さんが毎年企画運営している「カンボジアスタディーツアー」のなかに、無料で参加できる「高校生枠」があります。

実績

2015年度にチャレンジプログラムに参加した生徒は26人となりました。参加人数やインターン受け入れ先をむやみに増やすことを目標とせず、ニーズが合致した高校生に出会った時にすぐに機会を提供できるような体制づくりに取り組みました。



高校生の声

自分の気持ちを大事にできるようになりたい

私は湯布院のゲストハウス「時のかけら」で11日間インターンをしました。高校に入って、勉強や人間関係の悩みが重なって、「日常から逃げ出したい」という気持ちがあったんですが、ゲストハウスのお手伝いをしたり、すごく綺麗な景色の中で一人でボーッとしながら、「なんて幸せなんだろう」と感じたり、なにより大阪に帰ってきて、友達に無理に合わせるのではなく、「自分の気持ちを大事にできるようになりたいな」と思えるようになりました。普段私の周りにはいる大人とは違う生き方を見せてくれたオーナーさん、スタッフさん、湯布院の自然、ヤギや豚や鳥たち、全てに感謝です。

佐野 光宙(さのみそら)さん

唯一とっていいほどの、つながり

田中瑠嘉さんと大関哲洋さんは、通信制高校に通う高校生。
D×Pとの最初の出会いは、彼らが当時1年生のときの授業で参加したクレッシェンドでした。当初は周囲と話すことが苦手そうな様子でしたが、クレッシェンドが終わったあと、D×Pのスタッフに勧められ、D×Pの写真部に定期的に参加するようになります。そして2015年4月には自分たちで撮った写真を展示した写真展を開催。最初にクレッシェンドを受けてから、田中さんは3年、大関さんは2年になります。彼らに、今の率直な心境を聞いてみました。

たなか るか おおせき てつひろ
高校生：田中 瑠嘉さん・大関 哲洋さん インタビュー：D×Pスタッフ



2015年4月に開催された写真展での集合写真

過去の経験談で、楽になれた [クレッシェンド]を経て

● そもそも2人は、なんで通信制高校を選んだの？

田中(以下田) 色々理由はありますが、中学の出席日数が足りなくて、行きたかった高校に行けなかったんです。

大関(以下大) 学校が大嫌いだったので。僕は「学校」という場が、強制的でわざとらしいなって感じて、中学の後半はほぼ登校してなかった。でも少しは外に出ないといけないかなとは思っていて、出席日数が少なくてすむ通信を選びました。

● クレッシェンドを受けてみてどうだった？

田 僕はクレッシェンドを2回受けました。カルタとかすごろくとかの、アイスブレイクが楽しくて好きでした。授業の細かいところは覚えていないんですが、コンポーザーさんの話を思い出すことがあります。昔のしんどい経験を夢で見た時に、その話を思い出します。話の内容は忘れちゃったけど、「昔、自分も○○が原因でいじめられていたけど、今はこうこうで…」って話なんですけど。内容というより、こういうことを言っている人がいたなっていう事実だけで楽になれるんです。

● D×Pのスタッフで、よく連絡とってる人はいる？

田 はい、たっちゃん(D×Pスタッフ)とゴンちゃん(通信制高校の卒業生。過去にD×Pで写真展を開催した)はすごく話しやすく、今でも愚痴を聞いてもらったり、相談に乗ってもらったりしています。僕はお父さんがいなくて、周囲に話せる男の人がいないので、新鮮で話しやすいですし、2人のことはとても信頼していますね。

外に出るハードルが下がったな [アフタークレッシェンド]を経て

● その後、写真部に来てくれたんだけど、そのきっかけは何だったの？

田 特に理由はなくて、スタッフのたっちゃんに誘われたからですね。写真は好きだったけど、カメラは持ってなくて、でもガラケーとかで撮るのは好きでした。

大 僕は、誘われたからってだけです。カメラも特に好きじゃなかったけど、たっちゃんに誘われたからってのが理由ですね。

● 写真部に入った後と前ではどう？

田 前は人の多いところはダメだったんだけど、最近はちょっと慣れましたね。特に下校中の高校生とかとすれ違ったりするのが嫌で仕方なかった。向こうから歩いてきたら、路地裏に隠れるレベルでダメだったんだけど、今は大丈夫になりました。あとはカメラを向けられるのが嫌いだったんだけど、それも今はなんとも思わなくなりました。

大 僕は1人での外出が増えたかなって。どこにいくというわけではないですが、外に出るハードルが下がったなと思います。それまでは基本的に家にいてゲームをしていて、長くて2週間、家から出ないこともあった。今は写真を撮ることを口実に外に出かけるようになりました。



田中 瑠嘉さん撮影



大関 哲洋さん撮影

文章を褒めてくれて、嬉しかった。 [チャレンジプログラム]を経て

● 2015年の4月に写真展が開かれたけど、2人はなんで写真展に参加しようと思ったの？

田 ゴンちゃんに誘われたからです。最初はめっちゃ嫌でしたね。当日熱出して休もうか…と思ったぐらい(笑)。写真を飾られるのはいいんですけど、トークライブで人前で話さなかん時間があるって、それが嫌すぎて。緊張しすぎて終わったあと泣きました。

大 僕の場合は写真部に入って時間は経っていたけど、そんなに写真の枚数が多くなかったんで、僕が参加していいのかなとは思いました。でもまだ空きがあるとのことだったので、参加してみようかなと。

● 写真展に参加してみてどうだった？

田 楽しかったですね！トークライブが終わったあと、お客さんが写真の前に来てくれて、僕に話しかけてくれたんです。写真のことは何も言われなかったんだけど、写真を説明する文章を褒めてくれて。それがとても嬉しかった。

大 僕はトークライブにも出なかったし、飾っただけだったんで、特別どうというのはいないですが…。でも、写真部は、僕の外との唯一とっていいほどの、つな



写真展でのトークイベントの様子



がりだと思ってるんで。今までは集団で外に出ることすらなくて、あったとしてもそれが続くことはなかった。でも、写真部の活動は継続しているから。

田 最初に写真部に入った理由のひとつは、寂しかったから。寂しいから写真部に行ったら、ゴンちゃんとかいろんな人に会えて、なんか楽しいなって思うようになって、続けているのかなと思います。

● これから写真を通じてやりたいことはある？

大 写真は趣味ですね。特に鳥みたいな、動いてて撮りにくい生き物を追いかけるのが好きです。風景は誰がとって大体同じだけど、生き物はその瞬間でしかその写真は撮れないから、好きなかな。

田 可愛いものをとるのが好きなので、もっと可愛く撮れたらいいなと思ってます。あと最近すごく忘れっぽくて、見た景色にすごく感動しても、次の日には忘れてるから、忘れないように写真を撮っていきなさい。



お花見しながら2人にインタビューさせていただきました！

コンポーザーの Composer's voices

D×Pのコンポーザーは、現在134名。様々なバックグラウンドをもった大人たちが集まっています。2015年度、クレッシェンドに何度も参加してくれたコンポーザー2人に、高校生と関わるなかでの気づきや想いを聞きました。

ながわ さとみ
中川 沙登美さん



あずまゆい
東 唯さん



授業で突然帰る高校生—「ちゃんと素直やな」

定時はやんちゃな高校生が多いイメージがあったから、初めて授業に行くときは緊張しました。でも行ってみたら皆かわいくて、なんもビビる必要ないって思いました。高校生と話して感じたことは、自分の高校生時代と比べて、みんな色々よく考えてるってこと。私は「学校は行くもの」だと思って、何も考えずに当たり前のように授業を受けてたけど、高校生のなかには、授業が面白くなかったら突然帰ったりする生徒もいる。それって「ちゃんと素直やな」って思います。周りに流されず自分の感情を大事にする。私がコンポーザーをやっているときに、そんなふう突然帰っちゃう生徒がいたら、面白くないことをやる私にも責任はあるから「もっと楽しい時間をつくらう」って思います。

コンポーザーも生徒も不安。でもそれが普通の出会い方

クレッシェンドに参加する時は、生徒がどんな過去を持ってるかとか、どんな人なのかっていう情報がない状態なんです。でも通信制や定時制の高校に通っている生徒の中には、しんどい思いを抱えている生徒も多いので、「この話は聞いて良いのかな？聞かれたくないかな？」とどうしても探り探りなやりとりになってしまっ、不安でした。でも、あるD×Pのスタッフが、「それが普通の人間関係。お互い初対面で、片方だけが相手の情報を沢山持っているという面接みたいな人間関係、あんまないやん？」って言ってて。確かにそうやって思いました。相手のことを何も知らないのはコンポーザーも、生徒も一緒。それが普通の人と人との出会い方。だから、何も怖がることはないなって、今は思っています。



ただ一緒に泣くぐらいしかできないけど

私が高校生の頃は、よく学校を休んで。先生に理由を聞かれて「お昼ご飯を買うお金がないから」と答えたら、先生が自分の愛妻弁当を分けてくれた。「お前の気持ちはわからん。だけど、これくらいのことではできる」と言って。コンポーザーをやっている、目の前の生徒の気持ちなんて私には分からない。その生徒と同じ経験をしているわけじゃないから。その生徒の背負っている問題をなんとかしようとも思っていない。私がしんどかった時も、なんとかしてくれる大人なんていなかった。それでも私は、先生がお弁当を分けてくれたみたいに、その子の気持ちに寄り添うことはできる。ただ一緒に泣くぐらいしかできないけど、それでもいいのかなと思っています。

私も彼らの希望になりたいな

私の家庭環境はもうしんどかったんです。だから、家庭なんて持ちたくないって思っていました。でもある高校生が「俺も家庭持ちたくない。父親が暴力ふるってたら、そういう親になりたいくない」って言って「わかる、私もそうだったから」って共感したら「ゆいっぺみたいなのもいるんやったら、希望持ってもいいかな」って言ってきて。そんな希望を持った若者を見ていたら、「じゃあ、私もその希望になりたいな」って思うようになった。いつか「結婚って大変だな、家庭って嫌だなって私もずっと思ってた。でも今は幸せだよ」って話したら、少しは高校生の希望になれるのかなって思っています。



自信を失った若者が「幸せを感じる」ために

D×Pの事業の有用性と、これからへの期待

平成10年頃に不登校者数・高校中退者数とも10万人を突破して以降、その受け皿として通信制高校やサポート校が注目を浴び始めました。しかし、一方で通信制高校などによっては、入学してくる生徒層の変化に対応しきれず、在学中の人との出会いが少なく、次の所属先が決まらないまま卒業してしまうという課題が表面化していきました。

不登校経験者の多くは過去に人に傷つけられたり、惨めな思いをしたりして、自信を失った子どもたちです。「自信」は、所属があり、人との繋がりがあるからこそついていきます。通信制高校を卒業後に孤立させないためには、在学中にたくさんの人に出会い、学校外でも成功体験を積み重ね、自信を付けることがポイントだと思っています。

ただ、私自身も20代の後半に自信を失い、家に長くひきこもっていたから分かるのですが、その段階では自ら進んで第三者に会いたいとは思いません。そこが不登校経験者の一番難しい部分であり、通信制高校の先生方が苦勞しているところですので、第三者に出会うための仕組みが必要です。

そこでD×Pでは、通信制高校の授業や特別活動、総合学習などの時間をうまく使い、学校側と連携して通信制高校の生徒が第三者に出会うという仕組みに挑戦し、構築に成功した社会的にも価値ある団体です。D×Pの取り組みが本格的にスタートしたのは、私が以前勤めていた通信制高校の総合学習の時間を使って授業をしたことでした。そこでは、コンポーザーが失敗体験を語るにより「分かってくれる大人」として信頼関係を結び、さらにその信頼できる大人が、自分のやりたいことを応援してくれ、勇気を持ってチャレンジをしていく仕組みを構築していました。そして、学校側とも連携をしながら、成功体験を積み重ねて自信を取り戻すことにより、生徒自

身の自己肯定感が戻ってきたり、将来を考えるようになったりなど、大きな変化をもたらすのを目の当たりにしました。

今再認識することは、D×Pのような家族でもなく、学校の先生でもない「第三者との繋がり」が自信を失った人々には本当に大切であるということです。しかし、自信を失った人々は通信制高校だけにいるのではなく、全日制高校にも多く存在し、卒業後に孤立している人たちが多く存在します。現在D×Pは全日制高校との連携を始めている段階だとは思いますが、単年度で終わるのではなく通信制高校とは違う継続的な支援の構築を行ってほしいと思います。

自信を失った人々に携わる支援者の目標は、本人が数年後に「幸せを感じる」ことであるはず。D×Pの取り組みは、その実現に向けての一つの有効な手段を確立しつつありますので、今後のさらなる飛躍を期待しています。



きんば むねあき
金馬 宗昭
すずかけ教育相談所所長
(元通信制高校教頭)
不登校・ひきこもり専門カウンセラー。1969年生まれ。大学を卒業後、高校で講師生活をする。20代後半に数年のひきこもりを経た後、不登校のボランティアを経験。その後、通信制高校のサポート校に勤務。2008年には通信制高校の教頭となる。2015年より不登校・ひきこもり専門の相談室を開設。著書に「不登校・ひきこもり ころの解説書」(学びリンク・2010年)、「不登校・ひきこもり ころの道案内」(学びリンク・2015年)。
www.futoukou-hikikomori.com

若者にとって、「重要な他者」との関係性を構築する

現代社会における、先駆的かつ挑戦的なD×Pの実践

今日、通信制・定時制高校に通う生徒たちへの学習・進路支援に関して、その必要性が社会的に喚起され始めています(※1)。こうした背景には、不登校や高校中退経験等、教育上の「しんどさ」を抱えた生徒たちが一定程度在籍する実態があります(※2)。このような状況下で認定NPO法人D×Pは、『ひとりひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会』をビジョンに、通信制・定時制高校に通う高校生を支援しています。

ここでD×Pの実践の先駆性として、「社会関係資本の構築」と「成功体験の醸成」を同時に提供する活動方針、を取り上げたいと思います。D×Pは通信制・定時制高校に通う生徒たちに対して、学校内部での関係性だけでなく、同時に、学校外部(社会)との関係性の構築を企図します。言い換えれば、成功体験を醸成しながら、生徒と社会との「架け橋」を提供しようとしています。こうした実践は、まさに生徒が将来の進路選択を決定する上での「重要な他者」となりうるでしょう。

さらにD×Pは、そうした「重要な他者」となる「コンポーザー」について、社会人ボランティアを起用している点が大変特徴的です。通常、こうした支援活動では、内部スタッフの活用が想定されがちです。一方D×Pでは、各高校が位置する地域の人的資源を最大限に活用して実践を試みています。コンポーザーの採用時には、その性別や年齢層、職業等に関して充分配慮されているため、プログラムに参加する生徒たちは、多様な大人たちとの触れ合いを通じて自分の将来を見つめることができます。この際、スタッフが単なる生徒たちの支援者ではなく、学校(教員)と地域住民との「架け橋」になっている点も大変重要です。こうした取り組みは、学校と地域との連携の必要性が喚起されている現代社会において、先駆的かつ挑

戦的な実践であると評価できます。そして、こうした実践が数多くのサポーターからの寄付によって成立していることも鑑みれば、D×Pの実践に対する社会的期待及びその社会的意義は大きいと言えます。

最後に、D×Pが抱える課題として、実践活動の正確な成果評価が行われていない点が指摘できます。外部の専門家と連携して正しく成果を測定することにより、有効な支援活動を行い、寄付者や連携パートナーへの説明責任を果たすことができます。今後の活動に大いに期待したいと思います。

※1：阿久澤麻里子(他)、2015。「通信制高校の実態と実践例の研究：若者の総合的支援の場としての学校のあり方」[文部科学省 平成24～26年度 科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書] など

※2：文部科学省 平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」など



うちだ やすひろ
内田 康弘
名古屋大学大学院 教育発達科学研究科
博士課程後期課程3年
日本学術振興会特別研究員(平成27～28年度)
専門は教育社会学・子ども社会学。主に通信制高校・サポート校へのフィールド調査を行い、不登校・高校中退経験を持つ生徒たちの進路選択に関する研究を行っている。主要論文は、「サポート校生徒と大学進学行動：高校中退経験者の『前籍校の履歴現象効果』に着目して」[教育社会学研究]第98集(2016)、「サポート校生徒は高校中退経験をどう生き抜くのか：ステイグマと『前籍校』制服着装行動に着目して」[子ども社会学研究]第21号(2015)など。

STAFF 理事・職員



いまい のりあき
今井 紀明
理事長
新事業をつくり、新しいネットワークを築き続けるD×Pのブルドーザー役。全国を飛び回っていますが、本当は引きこもるの好き。



しおだ りょう
塩田 陵
副理事
ファイナンシャルアナリスト。創業期からD×Pの財務とクレッシェンド運営を担ってきました。高校生と話すのが何より楽しみ。



むらなか なおと
村中 直人
理事
発達障害などの学習支援や支援者育成を行う「子ども・青少年育成支援協会」理事。経営×臨床心理の2つの視点でD×Pを支えます。



かわかみ たつりのり
川上 竜典
生徒と社会をつなぐ事業部 部長
D×Pの要である現場運営の全体責任者。D×Pの創業メンバーであり、クレッシェンドを創ってきました。趣味のフットサルに本気。



いりたに さち
入谷 佐知
広報・ファンドレイジング部 部長
D×Pの資金調達・広報・組織運営を担うマネージャー。その他D×Pの足りないところを見つけて補う担当。家では1児の母。



こそこの あすか
小園 明日香
生徒と社会をつなぐ事業部



かねこ ゆうき
金子 祐樹
生徒と社会をつなぐ事業部



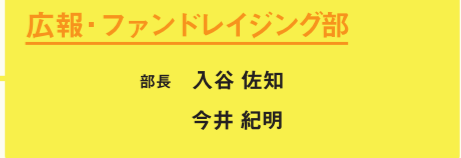
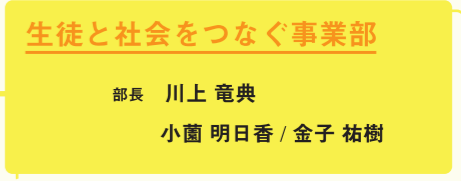
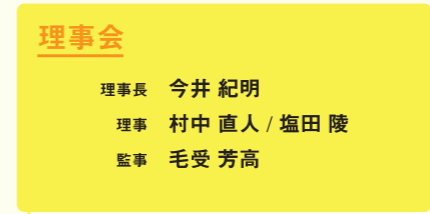
すぎうら さとし
杉浦 智之
経営管理部
前職で中国に8年駐在していたので愛称はジャンパー(中国語読みで「杉浦」)。D×Pの業務効率化に日々勤しんでいます。

2016年1月に中途入社。主に生活保護家庭の中学生向けプログラム運営を担い、居心地の良い場作りを目指して奮闘中。若干天然。

インターンを経て2016年4月に新卒入社。主に通信・定時制高校で行うクレッシェンドの運営を担っています。D×Pのお笑い担当。

2015年度のD×Pインターン 近藤 紗恵子、額額 建人、金子 祐樹、野津 岳史、熊沢 あずさ、櫻木 良憲、荒木 雄大、中西 みちる

ORGANIZATION 組織図



たくさんの方に支えていただいた1年

D×Pが、経済的にしんどさを抱えた高校生が集まる公立高校でプログラム導入が実現できているのは、ご寄付・ご助成いただいている方のおかげです。一部となりますが、サポーターの皆様をご紹介します。

● スポンサー企業・個人の皆様(一部/順不同)

福武純子様	お届けします夢と心 株式会社 水晶院 株式会社水晶院	kao 花王ハートポケット倶楽部
三井住友銀行 ボランティア基金	阪急阪神ホールディングスグループ 阪急阪神 未来のゆめ・まち基金	長 公益財団法人長谷福祉会
cocowell 株式会社ココウェル	commons asset management, inc. コモンズ投信株式会社	NAOMI 株式会社ナオミ
株式会社りんゆう観光	LITALICO 株式会社LITALICO	暮らし工房 有限会社サワキ
chatwork チャットワーク株式会社	GOODS買取ネット GOODS買取ネット	Japan Parking Service 株式会社日本駐車場サービス
N 野澤会計事務所	カエサル! 株式会社カエサル	M Toki No Kakeru 秘密基地 時のかけら

● サービス無償提供・間接寄付・高校生受入企業(一部/順不同)

株式会社LITALICO / 株式会社起福 / NPO法人PaKT
株式会社ココウェル / GOODS買取ネット / ケーキ屋さんこいまり
旬菜鮮魚 てつたろう 梅田中崎町店(株式会社フォーシックス)
共進情報企業協働組合 / チャットワーク株式会社
株式会社セールスフォース・ドットコム / 旅館 但馬屋
時のかけら / ビッグイシュー基金

● マンスリーサポーター・単発寄付をいただいた方

259人

2015年度はマンスリーサポーター(定額寄付会員)の皆様が228名、単発自由寄付をいただいた方が31名となりました。「寄付を通じて、私も若者の課題に取り組むことができている。ありがとう」と言ってくださる方もおり、温かいご支援をいただきました。

● 2015年度 収支計算書 (2015年4月1日から2016年3月31日まで)

(単位:円)

科目	金額	
I 経常収益		
1. 事業収益		
教育支援事業収益	11,595,420	
講演活動事業収益	1,318,997	12,914,417
2. 受取寄附金		
受取寄附金	17,645,544	17,645,544
3. 受取助成金等		
受取助成金	800,000	800,000
4. 受取会費		
正会員受取会費	40,000	
賛助会員受取会費	0	40,000
5. その他収益		
受取利息、他	1,911	1,911
経常収益計		31,401,872
II 経常費用		
1. 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	10,139,403	
法定福利費	1,078,034	11,217,437
(2) その他経費		
旅費交通費	3,142,883	
賃借料	588,858	
印刷製本費	202,379	
消耗品・備品費	115,882	
雑費他	2,784,518	
事業費計	6,834,520	18,051,957
2. 管理費		
(1) 人件費		
給料手当	5,121,284	
法定福利費	412,111	5,533,395
(2) その他経費		
旅費交通費	1,541,763	
賃借料	501,692	
消耗品・備品費	344,194	
通信費	272,368	
雑費他	3,103,218	
管理費計	5,763,235	11,296,630
III 経常費用計		29,348,587
当期経常増減額		2,053,285
経常外収益		
IV -		0
経常外収益計		0
経常外費用		0
経常外費用計		0
税引前当期正味財産増減額		2,053,285
法人税・住民税及び事業税		158,100
当期正味財産増減額		1,895,185
前期繰越正味財産額		4,373,346
次期繰越正味財産額		6,268,531

通信制・定時制高校のプログラムの増加と、大学初年次教育プログラムが増加したため、約470万円の増収となりました。

寄付会員およびスポンサー企業の皆様からのご寄付が増えたため、昨年度より約800万円の増収となりました。

1月に事業部メンバーに正社員1名が加わり、人件費の増加となりました。

札幌大通高校でのプログラムや東京/地方での講演活動が増加したため、旅費交通費が約120万円の増加となりました。加えて、事業規模の拡大によりその他経費が約130万円増加しました。

11月に管理部メンバーに正社員1名が加わり、人件費の増加となりました。

2016年度に、アフタークレッシェンドの充実化や地域に根ざしたプログラム運営・各機関との連携強化を予定しており、次期への資金を残しています。

※ 今年度はその他の事業を実施していません。

MEDIA メディア掲載歴(一部)

新聞

- 2015.05 毎日新聞(朝刊)「高校生を支援 今井さん講演」
- 2015.08 北海道新聞(朝刊)「札幌大通高で対話授業」
- 2015.09 読売新聞大分版(朝刊)「APUの力 多様な価値観認め合う」
- 2015.10 京都新聞(朝刊)「悩んだ経験、生徒の力に」
- 2015.11 北海道新聞(朝刊)「札幌の定時制高、大学 NPOがキャリア教育」
- 2016.01 朝日新聞(朝刊)「多様な学び 回り道でも」
- 2016.01 毎日新聞大阪版(朝刊)「通信・定時制の高校生支援 対話通じ、未来開く」
- 2016.02 毎日新聞岡山版(朝刊)「若者の明日開きたい」

テレビ

- 2015.04 TBS「TBSテレビ60周年特別企画 テレビ史を揺るがせた100の重大ニュース」にて放映
- 2015.07 BS11「報道ライブ21 INsideOUT」にて放映

雑誌

- 2016.01 阪急阪神HDグループ情報誌 ゆめ・まち・みらい vol.28「ゆめを力に変える人」

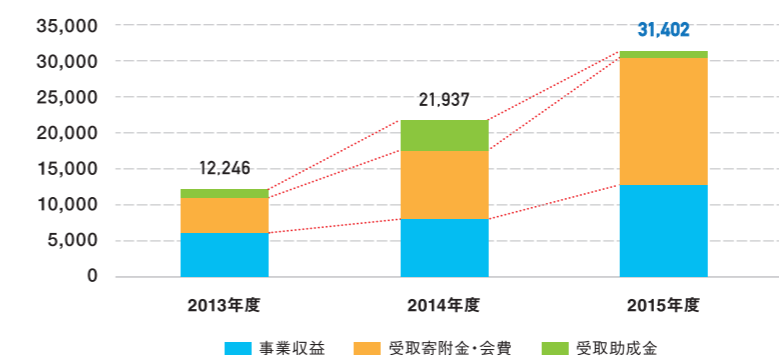
インターネットメディア

- 2015.04 学びの場.com「キャリア教育で希望をもてる生徒たちへD×Pの活動紹介」
- 2015.07 ほぼ日刊イイトイ新聞「生きる場所のつくりかた」

AWARDS 受賞歴

- 2015.01 第5回地域再生大賞にて「優秀賞」を受賞
- 2015.08 理事長の今井が、コモンズ投信株式会社の第6回SEEDCap(社会起業家応援プログラム)に選定
- 2015.11 CB・CSOアワード2015にて「優秀賞」を受賞

● 経常収入 3期比較 (単位:千円)



この収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、認定特定非営利活動法人D×Pの収支を正しく示していることを認めます。



めんじょう よしたか
監事 毛受 芳高

一般社団法人アスパシ教育基金 代表理事

1999年NPOアスクネット設立。学校と地域をつなぐキャリア教育コーディネーターのモデルをつくり、国と連携し、全国へと拡大。その後「一般社団法人アスパシ教育基金」を設立。

D×P's PROSPECTS of 2016

2016年度以降のD×Pは、ビジョン「ひとりひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会」の実現に向け、地域に密着しながら高校生が社会関係資本を構築できる仕組みをつくります。そのため、自治体、企業、地域住民や他NPOとの連携を強化し、協力して高校生を支援する事例をつくっていきます。

1

「学校を中心とした地域単位」でD×Pのプログラムを提供していく

これまで

クレッシェンドに携わる社会人・大学生ボランティア「コンポーザー」は、その学校から離れた他地域に住むオトナたち。アフタークレッシェンドも学校によっては遠く離れたD×Pの事務所で行っていました。それにより、クレッシェンドで信頼関係を築いたコンポーザーと高校生が、プログラム後も会う機会をつくるのが難しい状況でした。

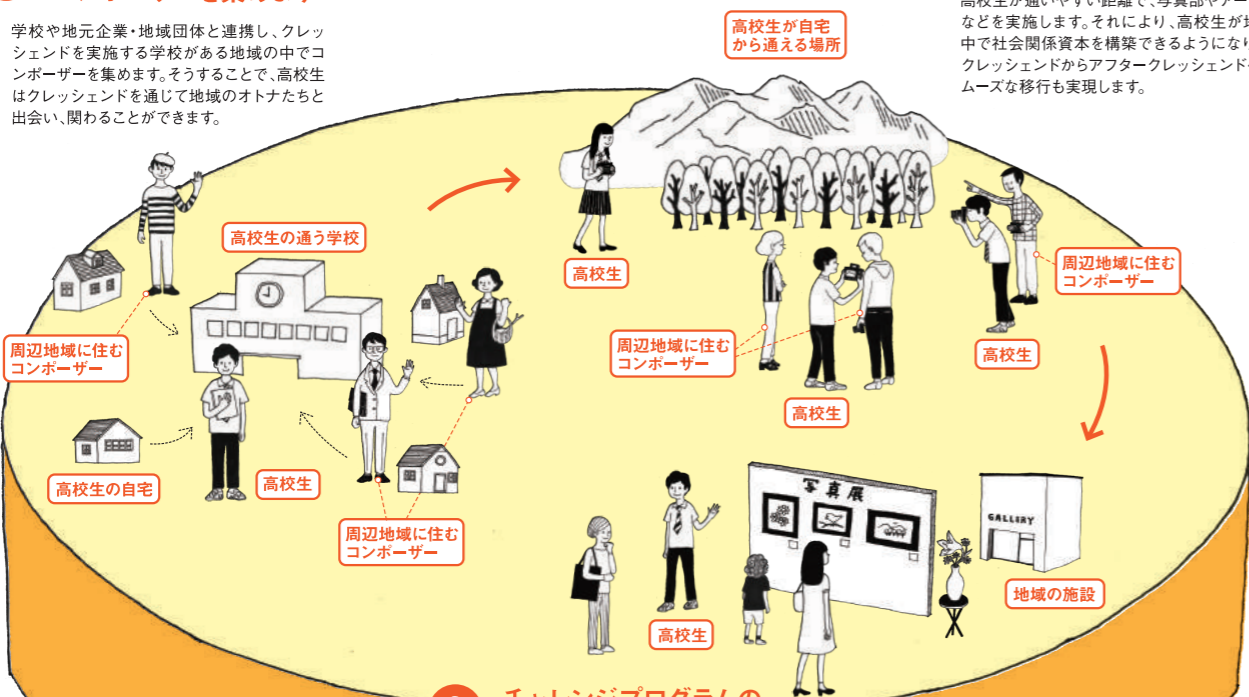


これから

学校・自治体・地元企業・地域団体と連携しながら、「学校を中心とした地域」に住むオトナたちをコンポーザーとして募り、アフタークレッシェンドもその地域のなかで行うことで、高校生とオトナたちが関係性を築きやすい土壌を築いていくことを目指します。2016年度はその事例を1～2地域づくり、試行錯誤する年にします。2017年度以降はさらにその地域を増やし、次のステップであるチャレンジプログラムの内容の充実化にも取り組んでいきます。

1 高校生の生活圏内からコンポーザーを集めます

学校や地元企業・地域団体と連携し、クレッシェンドを実施する学校がある地域の中でコンポーザーを集めます。そうすることで、高校生はクレッシェンドを通じて地域のオトナたちと出会い、関わるすることができます。



3 チャレンジプログラムの機会提供をしていきます

「何かやってみよう」という気持ちになった高校生に対しては、チャレンジプログラムの機会を紹介していきます。2017年度以降はアフタークレッシェンドからチャレンジプログラムの移行の仕組みづくりや、内容の充実化を進めます。

2 高校生の生活圏内でアフタークレッシェンドを

高校生が通いやすい距離で、写真部やアート企画などを実施します。それにより、高校生が地域の中で社会関係資本を構築できるようになります。クレッシェンドからアフタークレッシェンドへのスムーズな移行も実現します。

2

社会関係資本が構築できる「仕組み」をつくる



これまで

クレッシェンド(授業)の運営に手一杯で、なかなかアフタークレッシェンド(授業後)のプログラム内容を充実化させることができませんでした。よって、クレッシェンドをきっかけにできた高校生とコンポーザーとの関係が、その後につながらないことが多くありました。



これから

クレッシェンドのなかで、アフタークレッシェンドへの参加を促せるような仕組みをつくります。また、プログラム内容の充実化や種類の増加に取り組めます。2016年度はアフタークレッシェンドを36回実施し、参加者数60名を目指します。2017年度は、100名以上の参加者数に広がります。

3

生活保護家庭にいる中高生に関わるために自治体との連携を強化する

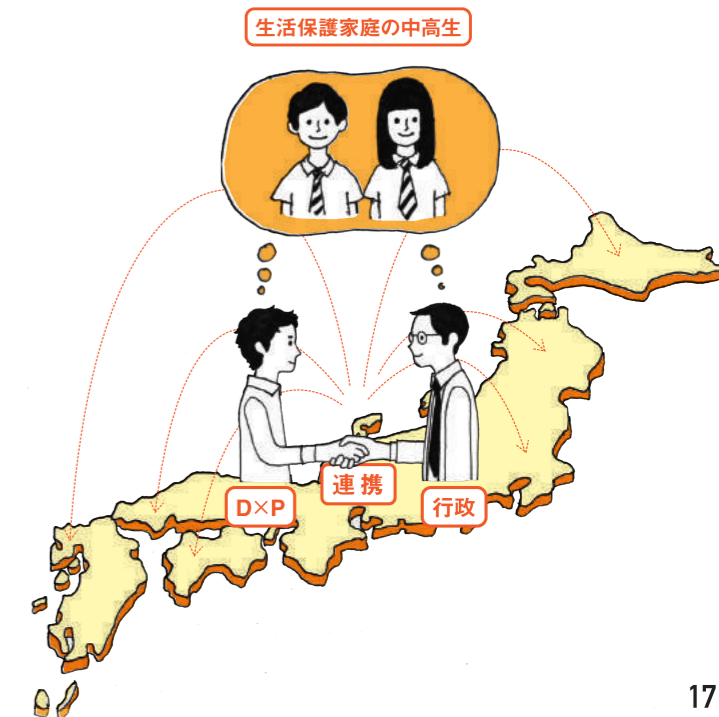
これまで

D×Pは2014年度から泉大津市と連携し、生活保護を受給する家庭にいる中高生が安心できる場所「いごちかふえ」をつくってきました。生活保護家庭にいる子どもたちは、学校に通っていない子も多く、D×Pの通信・定時制高校での授業だけでは出会えない存在です。この「いごちかふえ」では、参加した子どものうち3割が高校進学を決めるという成果を残すことができました。



これから

2016年度は泉大津市、東淀川区、他1件の3自治体でプログラムを実施していきます。2017年度以降は「いごちかふえ」の取り組みを積極的に広報していくことで、連携できる自治体の数を増やしていきます。





認定NPO法人D×P(ディーピー)

540-0032

大阪市中央区天満橋京町1-27 ファラン天満橋33号室

電話&FAX : 06-7222-3001

メール : info@dreampossibility.com

WEB : www.dreampossibility.com

Twitter : @npo_DxP

Facebook : www.facebook.com/npodxp

銀行口座 : 三菱東京UFJ銀行 大阪京橋支店 普通 0072241

楽天銀行 第二営業支店 普通 7079724

理事 今井 紀明、塩田 陵、村中 直人

監事 毛受 芳高

スタッフ 川上竜典、入谷佐知、小園明日香、金子祐樹、杉浦智之
野津岳史、熊沢あずさ、櫻木良憲、林紫月
丸山祐生、荒木雄大、余島純
[以下、2015年度内に卒業したスタッフ]
近藤紗恵子、瀨織建人、中西みちる

写真 荒木雄大、西川優介

デザイン・制作 NPO法人Co.to.hana